

■2018年度フライブルク大学主催夏大学参加者を引率して

ここ10数年にわたりフライブルクでの異文化体験談を参加者に報告してもらってきたが、平成最後のフライブルク大学夏大学体験記をお届けします。

2000(平成12)年に始まった派遣も今回で19回目を迎え、去る8月3日から28日の約1ヶ月間に開講された夏大学が平成最後の派遣となった。今回は数年前に新規開講された夏大学英語コースへの参加が可能となり、久しぶりに定員に程近い17名の本学学生諸君と若手教員2名がフライブルクへ向かいそれぞれが貴重な異文化体験をおさめてきた。

長年実施しているフライブルク大学医学部付属病院の院内薬局見学をはじめ、薬学部の研究室見学、市内の個人薬局の業務視察など本学独自のプログラムにも参加してドイツにおける薬剤師業務の一端をうかがい知ることができたことは本学参加者にとって大きな成果だろう。それに加えてハイデルベルクにある薬事博物館を訪問し、ドイツの薬学の歴史と伝統を学ぶこと

ができたのも貴重な体験だ。

1ヶ月の短い滞在であったが、参加者には今までの人生で味わったことのない魂を揺すぶられるような忘れ得ぬ体験だったに違いない。

この貴重な体験を2人の引率教員と3人の参加学生諸君に綴ってもらった。

2019年度はいよいよ20回目の派遣の年だ。20回目の節目の派遣には、体験談を読み異文化体験に興味を持った人、学生時代に短期留学を志し本学に入学してきた人、知らなかった自分を発見したい人など好奇心に満ち溢れる、より多くの諸君に参加していただくことを期待しています。

ドイツ語・外国文学担当准教授
日本フライブルクアルムニ会会員
桑形 広司

今年17名(3年次生3名+2年次生14名)が参加し、うち4名は英語クラスを受講しました。例年になく猛暑で、街中を走るBächle(水路)に1滴水がないという、珍しいフライブルク体験となりました。参加者は暑さと慣れない寮生活、積極的に発言する国際色豊かなクラスメイトに囲まれた授業、日本の常識が通じない生活等に当初は戸惑っておりました。しかし、試行錯誤しながら生活に慣れていき、最後には「帰りたくない気持ちも半分」と言いながら、修了証を手にしたときには全員に笑顔が溢れていました。

フライブルク大学薬学部、市内薬局、病院薬剤部の見学では、日本との違いや共通点を中心に熱心に質問していました。特に歴史ある大学の研究室では、レンガ造りの実験台や安全キャビネット(現在も使用されています)を見て感激し、薬局では薬剤師業務の幅の広さに感銘を受けていました。また、ハイデルベルク薬事博物館見学を有志で募集した所、ほぼ全員が参加し、薬学への思いに感激致しました。今後、これらの経験が日本の薬剤師の未来を作っていく材料となれば嬉しく思います。

毎週、目標と到達度を報告してもらいましたが、日が経つごとに目標内容や自己分析がより具体的になり、目標達成のための努力をしていたことを目の当た

りにできたことは教育職員として一番の喜びでありました。留学は、その後の人生を少なからず刺激してくれます。今年の参加者がこの経験を今後活かしてくれることを願うとともに、来年以降も多くの学生が参加し、成長の機会としてくれることを願っています。

臨床薬理学分野 鳥羽 裕恵
薬物動態学分野 河渕 真治



市内薬局見学時の集合写真
(説明してくれた元従業員の方と一緒に薬局前にて)

■ 2年次生 永嶺 沙也佳（ドイツ語クラス）

私は今回のドイツ留学で、「挑戦」することの大切さを実感しました。正直なところサマープログラムの案内を初めて目にしたときは、留学に対する「好奇心」という前向きな気持ちよりも、1ヶ月に渡る海外生活に対する「不安」が大きく、ためらってしまいました。しかし、留学に一步踏み出したことで、多国籍クラスでのドイツ語の勉強はもちろん、ルームメイトや現地の人々との交流、ドイツの病院、薬局、大学の見学など、日本ではできない数多くの経験ができ、とても学ぶことの多い1ヶ月を過ごせました。

フライブルクはフランスやスイスとの国境に近いいため、ドイツ文化だけでなくヨーロッパの多様な文化を肌で感じられたことも、一步踏み出して良かったと思える瞬間でした。英語や留学中学んだドイツ語で、苦戦しながらも現地の人々と意思疎通がとれたことは、これまでの外国語学習に少し自信が付き、今後、更に外国語を勉強しようというモチベーションにつながりました。不安に負けず留学に挑戦して本当に良かったです。

私は留学後、2つの挑戦課題を見つけました。1つ目は「ドイツ語の勉強を続け、将来もう一度ドイツを訪れること」、2つ目は「留学で出会えた人たちとの交流を続け、日常的に海外の出来事に興味を持つこと」です。このような機会を与えてくださった方々への感謝の気持ちを忘れずに、これからも失敗を恐れず興味のあることに挑戦する姿勢を続けていきたいと思います。



フライブルクの朝市

■ 2年次生 林 里香（ドイツ語クラス）

「こんなところで1ヶ月もやっていけるのだろうか」ドイツ語のみで進行する授業が始まって1日目、真っ先に感じたのは不安でした。しかし、学生の今だからこそできる同世代の外国人生徒との交流や現地の薬局、大学病院、薬学部の研究室の見学等、貴重な体験をし、1ヶ月後には大満足での帰国となりました。

先生やクラスメイトとの対話型授業では、海外からの学生が積極的に発言を繰り返していくのを目の当たりにし、消極的だった私も負けじと前のめりで授業に参加するようになっていったのは、自分でも驚きでした。

週末にはスイスやフランスにも足を伸ばしました。観光計画は一から自分達で立案せねばならず苦心しましたが、それがかえって自信に繋がったと思います。また、フライブルク大学の授業で学んだ知識を、現地の人とのコミュニケーションの中でアウトプットすることができ、達成感も得られました。

今まで様々な課外活動などに対し、尻込みをして行動に移せず、もどかしい思いをしてきた私ですが、今回思い切ってサマープログラムに参加したことで、非常に内容の濃い1ヶ月を過ごすことができました。こ

れからは留学中に身につけた積極性を活かし、興味のあることにどんどん挑戦して行きたいと思います。

最後になりましたが、充実した1ヶ月を過ごせたのは、引率の先生方や留学前からサポートをくださった方々のおかげです。貴重な時間を一緒に過ごしてくれたメンバー達にも感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



週末に訪れたフランス・コルマルにて

■ 2年次生 元川 典子（英語クラス）

友達、思い出、やる気。2018年の夏、私はたくさんものを得ました。

前期試験を終え休む間も無く到着したフライブルク。最初の1週間は、慣れない海外での寮生活、冷房なしの猛暑に、正直毎日のように日本に帰りたいたいと思っていました。それでも大学での授業はとても面白く、拙い英語ながらも色々な国から来ているクラスメイトと話すのが楽しくて仕方がなかったです。生活に慣れ始めた2週目からは自分達で計画し、週末にチューリッヒやパリ、ベネチアなどに行きました。携帯電話も満足に使えない中、案内所や地元の方と英語でやりとりをして、やっと目的地に着いた時には、景色に感動すると同時に、達成感でいっぱいでした。3週目以降は、最早日本に帰りたくない程フライブルクでの生活が気に入っていました。クラスメイトたちとカフェや昼食で、互いの夢などたくさん話し、同世代の学生として感銘を受け、刺激をもらいました。また京葉からの英語コースへの参加は今年度が初めてということでしたが、最終試験ではトップの成績を修めることができ、とても嬉しかったです。

先生やクラスメイトに卒業式で書いてもらったメッセージを読み返す度、普通の海外旅行では味わえない、貴重な経験をさせてもらえたのだ、行って良かった、と心から思います。このような機会を下さった引率の先生方、国際交流推進室の方、支えてくれ一緒に頑張ったメンバー、行かせてくれた両親には感謝できません。本当にありがとうございました。



授業風景